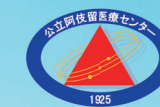




公立阿伎留医療センター



公立阿伎留医療センター 開院 100 周年記念誌

100th Anniversary

地域の皆さんと共に、次の100年に向けて歩む



巻頭グラフ

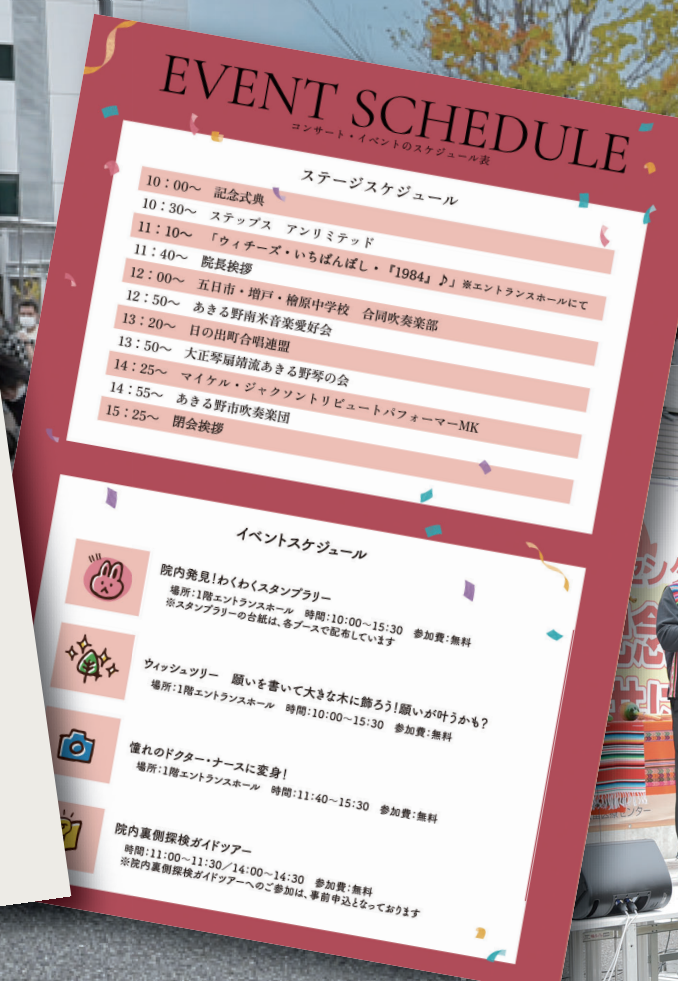
100周年の祝祭

2025年10月19日(日)

開催時間 10:00~15:30

会場: 公立阿伎留医療センター

巻頭グラフ





地域に根ざし、 世界に開かれた病院へ



公立阿伎留医療センターは、本年、開院百周年という大きな節目を迎えました。大正十四年、西秋留村長であった瀬沼利氏が、地域に蔓延していた伝染病の脅威から住民の生命を守るため、私財を投じ、自らの土地を提供して建設した「伝染病病院二十一床」が本院の原点です。西阿伎留村・五日市町、増戸村、多西村、平井村の協力を得て、昭和八年には東秋留村・大久野村が加わり、七町村による広域的な一部事務組合としての運営体制が確立しました。

戦後は結核が国民病と呼ばれる時代にあって、結核病棟を中心とする医療を担い、昭和四十七年には老朽化に伴い現在の引田の地に新築移転し、地域の総合病院として新たな歩みを始めました。その後、地域の急性期医療・救急医療・感染症医療を一体的に担う体制を整え、平成二十五年には地方公営企業法の全部適用となり、経営の自立性と説明責任を備えた現行の阿伎留病院企業団・公立阿伎留医療センターとして再出発いたしました。

本院は創設以来、地域に根ざしながらも、学術との連携を重視してまいりました。特に日本大学医学部との関係は深く、日本大学執行部の岡田清己名誉院長（泌尿器科学主任教授・板橋病院長）、荒川泰行名誉院長（旧第三内科主任教授・板橋病院長）、根東義明前企業長（医療管理学主任教授・医学部企画担当）をはじめ、多くの教授・医師の先生方にご指導とご支援を賜りました。この大学連携こそ、本院の医療の質と教育的使命を支える礎であります。

創設者瀬沼氏の志を胸に、百年の歴史に新たな一歩を刻むべく、「地域に根ざし、世界に開かれた病院」を次の世紀への理念と定めました。現在、最新鋭リニアックによる放射線治療の本格稼働、医療DXの推進、そして人材育成を三本柱に、地域医療の高度化と持続可能な運営の両立を目指しています。

百年にわたり地域の健康を守り続けてこられたのは、先人の高い志と、地域住民、自治体、医療関係者の変わらぬご支援の賜物です。これまで本院を支えてこられたすべての方々に深甚なる感謝を申し上げるとともに、これからも「信頼され、選ばれる公立病院」として、次の百年へ確かな歩みを進めてまいります。

令和七年十月
公立阿伎留医療センター企業団
企業長・院長 武井 正美



衆議院議員：井上 信治 氏
東京25区

これからも地域医療の中心に

公立阿伎留医療センター開院百周年、おめでとうございます。多くの皆さまが力を合わせて一世紀もの長きにわたって病院を大きく発展させてこられたことに、心から敬意を表します。

高齢化等が進展する中、地域医療の重要性は益々高まっています。阿伎留医療センターには地域のあらゆるニーズに対応した幅広い医療に加え、先進的な医療にも挑戦し続けて頂いており、とても心強く感じています。他方、公立病院は多様な機能を担っているからこそ、全国的に厳しい経営状況にあります。政府・与党においては、経営改善や従事者の処遇改善につながる補助金を迅速に措置し、報酬改定においては高齢化による増加分とは別枠で物価・賃金上昇分を確保することとしました。また、私自身、衆議院厚生労働委員会の筆頭理事として、地域医療構想の見直しや医師偏在対策等を行う医療法の改正等を実現しました。

公立阿伎留医療センターがこれからも地域に愛され、益々の発展を遂げられるよう私も応援してまいります。



あきる野市長：中嶋 博幸 氏

健康寿命の延伸と連携

公立阿伎留医療センターが開院100周年を迎えられましたこと、心からお慶び申し上げます。

公立阿伎留医療センターは、当時の西秋留村に伝染病院として開院されて以来、秋川流域の保健医療の確保と質の向上を図り、地域社会の発展に寄与されてきました。新型コロナウイルス感染症の拡大期には、開院当初からの理念を継承し、中核病院としての機能を存分に発揮していただくなど、これまでのご尽力に、改めて感謝申し上げます。

さて、あきる野市では、この記念すべき節目の年に32人の方が100歳を迎えられました。人生100年時代を迎えており、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で、個々の状況に応じた自立した日常生活を営むことができるよう、健康寿命の延伸を図るべく、健診事業や介護予防などに取り組んでおります。

貴センターにおかれましては、時代の流れとともに医療分野が大きく進展する中において、医療DXの推進や最新鋭のリニアックの導入などに取り組んでおられます。今後も、更なる医療の充実を図られ、住民が安心して暮らせるまちづくりにお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

結びに、公立阿伎留医療センターの益々のご発展と皆様のご健勝を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



日の出町長: 東 亨 氏

DX推進とリニアック導入への期待

公立阿伎留医療センターが開院百周年を迎えられましたことに、心よりお慶び申し上げます。

この百年の歳月は、医療を取り巻く環境が幾度となく変転する中にあって、常に地域に寄り添い、住民の安心と信頼を守り続けてこられた、尊い歴史の積み重ねであります。

医療は、地域社会の礎であり、人々が未来を描くための支えであります。百年にわたる経験と信頼は、この地域にとってかけがえのない財産であり、今日の貴院の姿は、先人のたゆまぬ努力と、職員の皆様の不断のご尽力の結晶として、燦然と輝いております。

さらに、貴院はDXの推進や、高精度の放射線治療を可能とするリニアックの導入など、新たな挑戦に取り組まれております。これらの取組みは単なる医療の発展にとどまらず、未来への羅針盤として地域社会に希望を灯すものであります。

日の出町は、これからも貴院とともに、地域医療と福祉の充実に努め、住民の暮らしを支える体制を着実に築いてまいります。

ここに改めて、百年の歩みに深く敬意を表し、貴院が地域の誇りとして、次の百年に向けて一層の飛躍を遂げられますことを、心より祈念申し上げます。



檜原村長: 吉本 昂二 氏

過疎地域における生命線として

公立阿伎留医療センターが、企業団（組合）創設100周年という記念すべき大きな節目を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。

企業長をはじめ、病院長以下職員や関係者の皆様のご努力の積み重ねの成果と、地域住民の方々の温かいご支援の賜物と、深く敬意を表します。

当センターは大正12年に組合設立されて以来、西多摩の中核医療施設としての機能強化に努められ、平成25年に「阿伎留病院企業団」となり、企業長の下、秋川流域における地域医療の確保と質の向上に取り組んで来られました。

私ども檜原村のような過疎化・少子高齢化が進む地域において、貴医療センターはまさに生命線とも言うべき中核病院であり、その役割の重要性は計り知れません。

100年と申しますが、この間、いくつもの困難がありその度に構成市町村と連携の要として地域医療の最適化のために日々のご努力と工夫があったこととご推察いたします。これからも、檜原村を含む秋川流域住民の厚い信頼に応え、持続可能な地域医療体制の確保という重要な役割を果たしていただく事を心からお願い申し上げますとともに、阿伎留病院企業団の益々のご発展と関係者皆様のご健勝を祈念申し上げましてお祝いの言葉とさせていただきます。

都立あきる野学園との連携

近隣にある障がい者施設「あきる野学園」と阿伎留医療センターは連携を取り合い、様々な活動を行っている。医療センターでは、開院100周年を記念して秋川流域の素材を活用したクラフトソーダを企画し、ラベルデザインには同学園のイラスト部が協力し記念品が完成した。

背景画には医療スタッフが語った患者さんへの応援や地域への感謝の音声をAIを活用して取り入れており、手書きのぬくもりと先端技術が融合したラベルが誕生した。



公立阿伎留医療センターを育てる会

市民の立場から地域の病院を支援し、よりよい病院になってもらおうとの目的で「公立阿伎留医療センターを育てる会」が発足し、今年で16年を迎えます。会長の下村先生、副会長の進藤先生、患者代表の副会長である橋本様には発足当時よりお元気に活躍いただき今大変お世話になっております。

病院ボランティア



記念式典では、ボランティア代表で深澤さんに表彰状を贈呈させていただきました。深澤さんには当時ボランティア希望者を募っていただき、病院の除草作業をしていただいたのが活動の始まりであったと伺いました。

また3階の緩和医療病棟での患者さんへのコーヒーサービスや患者さんとの会話や傾聴など勉強しながら今も元気に協力していただいております。

令和7年10月19日、 多くの来賓と地域住民に見守られ挙行された式典の記録。





【特集1】創業の魂 瀬沼利氏と「避病院」の物語

室務事院病村町々外村留秋西



瀬沼利氏

瀬沼利氏（せぬまとしうじ）と顕彰碑

明治12年(1879)、旧西秋留村油平の旧家で地主の瀬沼安兵衛の長男として生まれる。大正9年(1920)42歳で西秋留村長に就任。阿伎留病院の創立のほか、五日市鉄道の建設、西秋留小学校の移転と新築、西秋留村信用購買組合設立などにも関わった。阿伎留病院開院翌年の大正15年(1925)11月、在職中に病没、享年48歳。



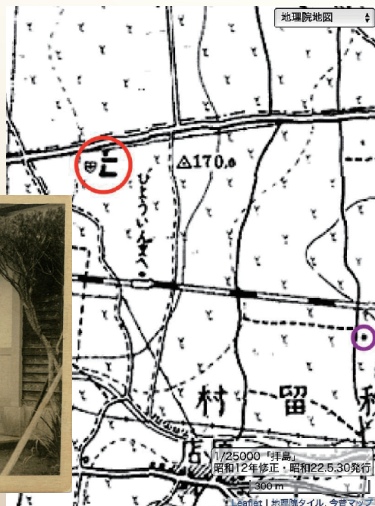
創設の背景 — 瀬沼利氏の決断

大正期の日本では都市化の進展とともに公衆衛生体制の整備が求められていた。1918年から1920年にかけて流行したスペインかぜは、日本で約2,300万人が感染し、20万人以上が死亡したと記録されている。東京府下の多摩地域でも感染症の脅威は深刻であり、西多摩郡西秋留村でも赤痢や腸チフスなどの流行が繰り返され、地域医療体制の整備が急務となっていた。このような状況の中、西秋留村長瀬沼利氏（せぬまとしうじ）は「地域の命を守る病院を」との信念のもと、近隣町村に共同病院の設立を呼びかけた。

1923(大正12)年、西秋留村・五日市町・多西村・平井村・増戸村による「西秋留村外四ヶ町村病院組合」が東京府の認可を受けて設立された。瀬沼利氏は病院建設用地として自らの土地を提供し、建設費の一部を私財で補ったと伝えられている。

1924年に病舎が完成し、1925(大正14)年4月、阿伎留伝染病院として開院した。病床数は21床、初代院長には都立駒込病院から犬塚道夫医師が着任した。

1933(昭和8)年には東秋留村と大久野村が加入し、「阿伎留病院組合」と改称された。瀬沼利氏が掲げた「公立による共同医療」の理念は、地域医療の基盤として受け継がれていくこととなった。



戦後復興と結核医療

戦後、日本では結核が国民病と呼ばれるほど深刻な社会問題となった。1947年には全国で14万人以上が結核で死亡している。阿伎留病院はこの時期、結核患者の療養と隔離治療を中心とした医療機関として重要な役割を担った。1952年には一般6床、結核114床、伝染病55床という病床構成となり、西多摩地域の結核医療の拠点として機能した。また巡回検診や胸部レントゲン検診の普及にも取り組み、地域の結核対策に大きく貢献した。

この頃から日本大学医学部との連携が始まり、1950年には比企内科学講座から榊原聰彦助教授が院長として赴任した。その後も大学からの医師派遣により診療体制の充実が図られていった。さらに地方自治法の改正により病院は一部事務組合へ移行し、檜原村が加わることで広域的な医療体制が整えられた。



総合病院への発展

1972(昭和47)年、老朽化した旧病舎に代わり、秋多町引田に鉄筋コンクリート4階建て・200床規模の新病院が完成し移転開院した。

翌1973年には東京都から総合病院として承認され、急性期医療、地域救急、母子医療を柱とする体制が整備された。これにより阿伎留病院は西多摩地域の中核医療機関としての役割を担うようになった。



公立阿伎留医療センターの誕生

1990年代以降、公立病院には経営改革と医療機能の高度化が求められるようになった。2013(平成25)年8月1日、地方公営企業法の全部適用へ移行し、名称を公立阿伎留医療センターと改称。阿伎留病院企業団として新たな経営体制が発足した。企業長制度の導入により、経営の透明性と自律性が強化された。また日本大学医学部との教育・医療連携も深化し、医師派遣や臨床教育、研究活動を通じて地域医療の質の向上が図られている。



百年の歩みと新たな挑戦

2020年の新型コロナウイルス感染症の流行は、公立病院の役割を改めて社会に示す出来事となった。阿伎留医療センターは西多摩地域の感染症拠点として診療体制を整備し、地域医療を支えた。

- ・2024(令和6)年6月、武井正美が院長に就任。
- ・2025(令和7)年4月には企業長を兼務した。同年本院は創設百年の節目を迎えた。

現在、本院は高度放射線治療体制の整備、医療DXの推進、若手医療人材の育成、学際的研究の推進などを柱に、地域医療のさらなる発展に取り組んでいる。

結び

阿伎留医療センターの百年は、伝染病との闘いに始まり、地域医療を守り続けてきた歴史である。創設者 瀬沼利氏の理念のもと、地域住民、自治体、医療従事者の努力によってその歩みは受け継がれてきた。本院はこれからも地域医療の中核として、次の百年に向け新たな歴史を刻んでいく。

平成18年(2006年) 最新の病院の建て替え完了



【特集2】日本大学との連携100 年史

(日本大学医学部からの派遣は75年の歴史)

1950年前後(昭和25年頃)

【大学派遣院長の草創期】

- ・ 榊原 聰彦^{※1} 助教授 (日本大学医学部 比企内科 旧第一内科)
 - 阿伎留病院の初代大学派遣院長として就任 (約2年間)
 - 結核病棟を中心とする医療へ移行

1950-1970年代

【外科主導期】

- ・ 森 実 院長 (日本大学 若林外科教室: 呼吸器外科 旧第一外科)
 - 約24年間の長期在任
 - 一般外科・手術体制を確立し地域医療の中核病院に

1970-1980年代

【専門科拡大と組織連携の進展】

- ・ 馬島 季磨 院長 (日本大学 産婦人科 主任教授)
 - 産婦人科診療の基盤整備
- ・ 整形外科・内科・小児科・産婦人科で日本大学連携が本格化
- ・ 菅井 義久 院長 (日本大学 外科 旧第一外科医局)

1990-2000年代

【日本大学医局と地域医療の確立期】

- ・ 平沼 俊 院長 (日本大学 旧第一内科医局)
- ・ 西成田 進 院長 (日本大学 旧第一内科医局)
 - 日本大学医局による地域医療への医療網の拡充

2000-2022年

【企業団化前後の黎明期】

- ・ 岡田 清己 名誉院長
 - (日本大学 泌尿器科主任教授 → 板橋病院長)
 - 専門診療科の質を引き上げ基盤を強化
- ・ 荒川 泰行 名誉院長
 - (日本大学 旧第三内科主任教授 → 板橋病院長)
 - 2007年より企業長兼院長として改革を主導
- ・ 根東 義明 前院長・企業長
 - (日本大学 医療管理学主任教授)
 - 医療経営・医療管理・医療DXを導入し、組織高度化を推進

2024-2025年

【統合的連携の完成期】

- ・ 武井 正美 院長・企業長
 - (日本大学医学部 血液・膠原病内科主任教授／内科学系主任教授
／日本大学副学長／日本大学医師会会長)
 - 初代大学派遣・榊原系統の直系として100周年を主導
 - 高度急性期化・臨床研究推進センター・DX推進を統括

【補注】

※1 榊原 聰彦 助教授 (旧第一内科) は阿伎留における大学派遣初代の確定史料に基づく。

※2 本系譜図は武井院長提供資料および院内アーカイブを基礎とし作成。

※3 文責：武井 正美、森 昭弘

【ビジュアル年表】激動の 10年と100年の変遷

直近10年の挑戦（2015-2025）

新型コロナとの闘い（原点回帰）



発熱外来



防護服スタッフ



ワクチン接種

公立阿伎留医療センターでは、2020年1月に新型コロナウイルスが我が国に上陸して以来、急速に感染拡大が進む中、感染災害の非常事態として新たなフェーズに突入したという判断のもと、2020年4月21日に「新型コロナウイルス感染症対策本部」を組織して本格的な感染予防と感染拡大防止対策事業の展開を始めた。その後5階西病棟にCOVID-19患者専用病床として確保して西多摩医療圏内外からの感染患者の迅速な受け入れと早期診断・治療体制の強化を図りました。

職員の意識改革と活躍

職員は、エッセンシャルワーカーとしての使命感と情熱をもって「うつらない」「うつさない」「広げない」の感染予防と感染防止対策の基本コンセプトを最大ミッションとして、非常勤や委託業者を含む全職員の健康管理の徹底、病院に入るすべての方に対して入り口でサーモグラフィー等による検温と健康観察、手指消毒とマスク着用および院内消毒の徹底に全力で取り組みました。

患者さんのケアは、チーム医療を大切にしてCOVID担当チームの医師と話し合いを重ね、研修を共に行い日々変化する状況に対応しながら治療を行ってきました。その都度チーム一丸となって問題を解決し患者さんにとって最善のケアを心がけてきました。

病院の「ケアミックス」と「企業団化」



感染症の病院として発足しましたが、のちに総合病院としてさらには、一般病床に加えてリハビリ病棟、緩和ケア病棟、地域包括病棟と人生の始まりから終わりまで、安心して利用していただける地域の基幹病院としての役割を持つ病院と発展してきました。

市町村などの地方公共団体が、行政サービスの一部を共同で行うことを目的として設置する組織（特別地方公共団体）を、一部事務組合といいます。（地方自治法第284条第2項）

一部事務組合のうち、地方公営企業の経営に関する事務を共同処理するものを「企業団」といいます。

普通地方公共団体である都道府県、市町村と同様に法人格を有し、企業長を長とする執行機関のほか議会を設置し、その運営を行っています。私たちは、時代の変化に対応するべく組織を「企業団」に変更して地域の皆様のための病院経営に取り組んでおります。

2020～2021

（令和2年～3年）



新型コロナ感染拡大。発熱外来・感染症病床設置。その後4東病棟閉鎖

2023～2025

（令和5年～7年）



- ・磁気共鳴断層撮影装置（3.0テスラ）を更新。
- ・全身用X線CT診断装置を更新。
- ・放射線治療機器（リニアック）の再稼働。
- ・山梨大学医学部放射線医学講座と医療連携協定を締結。
- ・血液内科新設。

2025～2026

（令和7年～令和8年）



- ・人間ドックの再開
- ・EBウイルス外来開始
- ・心臓血管外科外来開始
- ・急性呼吸器ウイルスマルチ迅速検査法の開発
- ・厚労省指定難病シェーグレン病専門外来開設
- ・檜原診療所歯科診療への医師派遣
- ・創立100周年記念事業を開催
- ・4階東病棟再開

100年の歩み（1918-2014）

1923～1950 (大正12年～昭和25年)



大正12年

西秋留村、多西村、平井村、増戸村および五日市町の五ヶ町村により「西秋留村外四ヶ町村病院組合」として東京府よりの設置許可を受ける。初代管理者には、西秋留村村長の瀬沼利氏氏が就任。



大正14年

単独伝染病院を開院する。（伝染病床21床）
初代院長には、東京府立駒込病院より犬塚道夫氏が就任。

1951～1970 (昭和26年～昭和45年)



昭和27年

病床数を一般6床、結核114床、伝染55床に変更する。



昭和45年

建物の老朽化に伴い、医療施設・設備の改善を目的に、3ヶ年計画で鉄筋3階建ての新病院の建設に着手。
（移転新築）

1971～1988 (昭和46年～昭和63年)



昭和47年～昭和48年

- ・秋多町が市政を施行、名称を秋川市に改める。
- ・新病院に移転し、診療業務を開始。
- ・新病床数一般128床、結核68床に変更する。



昭和58年～昭和63年

- ・「総合病院」の承認を受ける。
- ・全身用CTスキャナーを導入。
- ・新館工事完了。新病床数一般196床、伝染24床となる。

1989～2006 (平成元年～平成18年)



平成2年～平成3年

- ・伝染病隔離病舎廃止する（伝染24床減）一般病床196床。
- ・東館病棟開棟する。一般病床196床。8月7日にリハビリ専用病床29床許可（特例許可病床）。一般病床225床となる。
- ・血液透析室開設。



平成9～平成18年

- ・東京都災害時後方医療施設および災害拠点病院（国）の指定を受ける。
- ・医師臨床研修を開始。
- ・（財）日本医療機能評価機構による病院機能評価(Ver4.0)認定取得。
- ・病院情報システム（電子カルテ等）導入。

2007～2019
(平成19年～令和元年)



- 平成18年～平成21年
新病棟開院（7病棟・266床でオープン）
- ・緩和ケア病棟を開設。
 - ・消化器病センターを開設。
 - ・回復期リハビリテーション病棟を開設。



- 平成22年～平成25年
- ・DPC(診断分類に基づく包括評価制度)対象病院となる。
 - ・一般病棟入院基本料7対1を届出。
 - ・阿伎留病院企業団に組織変換。

2020～2025
(令和2年～現在)



- 令和2年～令和3年
- ・新型コロナウイルス感染症対策室を設置。翌日、「帰国者・接触者外来(新型コロナ外来)」の設置および4階西病棟の個室病床2床をCOVID-19患者の専用入院病床として確保。
- 院内に集団接種会場を設置し、構成3市町村住民を対象とした新型コロナウイルスワクチン接種を開始。



- 令和5年～令和7年
- ・磁気共鳴断層撮影装置(3.0テスラ)を更新。
 - ・全身用X線CT診断装置を更新。
 - ・放射線治療機器高精度なりニアックを導入。
 - ・山梨大学医学部放射線医学講座と医療連携協定を締結。

阿伎留医療センター100年の歩み
(年号別経過・制度史・機能史)

年 代	出来事・制度・背景	病床構成・機能	備考・出典
1918-1920（大正7-9）年	スペインかぜ流行。全国感染者約2,300万人、死者約20万人。	—	内務省衛生局『流行性感冒調査報告』（1921）
1923（大正12）年6月9日	西秋留村長・瀬沼利の提唱により、「西秋留村外四ヶ町村病院組合」設立（東京府認可）。構成：西秋留村・五日市町・多西村・平井村・増戸村。	—	『阿伎留病院組合沿革資料』（1934）
1924（大正13）年12月21日	阿伎野十三番地に病舎竣工。	—	『西秋留村史』（1956）
1925（大正14）年4月10日	阿伎留伝染病院開院（病床21床）。初代院長：犬塚道夫（都立駒込病院より）。	伝染病21床	『創立記録簿』（1925）
1933（昭和8）年11月3日	東秋留村・大久野村が加入し「阿伎留病院組合」と改称（7町村構成）。	—	『阿伎留病院組合沿革資料』（1934）
1945（昭和20）年	終戦。医薬品・人員不足が深刻化。	伝染病・結核混在	—
1947（昭和22）年	全国結核死亡者14万6,241人。結核療養・隔離治療を主軸化。	結核病床中心	『衛生年報』（1948）
1951（昭和26）年	結核予防法施行。巡回検診・レントゲン検診を導入。	—	厚生省資料
1952（昭和27）年	病床構成：一般6・結核114・伝染55。事実上の結核専門病院化。	計175床	『病床統計』（1953）
1954（昭和29）年7月1日	地方自治法改正により「一部事務組合」制度が施行。阿伎留病院組合は法第284条に基づく「公立病院一部事務組合」として再編準備。	—	地方自治法改正（昭和29年法律第161号）
1955（昭和30）年	東京都知事認可により正式に「阿伎留病院一部事務組合」として再発足。構成町村：西秋留・東秋留・五日市・多西・平井・増戸・大久野。一部事務組合設立時に檜原村参加	一部事務組合制へ	東京都公報・市町村事務組合設立一覧（1955）
1969（昭和44）年	一般140床・結核56床・伝染34床。総合病院への転換期。	230床	『東京都病院名鑑』（1969）
1970（昭和45）年	新病院建設計画を決定。	—	『新築工事報告書』（1972）
1972（昭和47）年	秋多町引田78番地に新築移転。鉄筋RC4階建・200床。	一般200床	同上
1973（昭和48）年	東京都より「総合病院」承認。「急性期」「救急」「母子医療」を3本柱とする。	一般200床	同上
1980年代	日本大学医学部との医局派遣開始。呼吸器外科・整形外科・産婦人科体制確立。	—	院内資料
1990年代	公立病院経営健全化方針により独立採算化を模索。	—	行政資料
2013（平成25）年8月1日	地方公営企業法「全部適用」へ移行し、「公立阿伎留医療センター企業団」として再発足。	企業団制	『企業団規約』（2013）
1997-2024（平成9-令和6）年	日大医学部元執行部による歴代企業長・院長：岡田清己（1997-）荒川泰行（2007-）、根東義明（2022-）、武井正美（2024-）。	—	院内人事録
2020-2021（令和2-令和3）年	新型コロナ感染拡大。発熱外来・感染症病床設置。その後4東病棟閉鎖。	感染症対応	院内資料
2025（令和7）年4月1日	武井正美 企業長兼任。創立100周年記念事業を開催。	新型コロナパンデミックなどによる経営困難で閉棟していた4東病棟（43床）再開 305床に戻す。	100周年記念資料

(1) 歴代企業団（組合）議会議長

氏 名	市町村	就任年月日	退任年月日
並木 國太郎	五日市町	昭和22年7月28日	昭和26年6月30日
石塚 豊治	五日市町	昭和26年7月9日	昭和34年10月1日
榎本 鶴蔵	五日市町	昭和34年10月26日	昭和38年10月1日
関田 繁一	秋多町	昭和38年10月26日	昭和42年10月1日
串田 八十八	五日市町	昭和42年10月10日	昭和46年10月1日
秋本 仙市	五日市町	昭和46年11月29日	昭和48年10月15日
上田 多喜夫	五日市町	昭和48年11月29日	昭和50年10月1日
井上 裕	五日市町	昭和50年10月20日	昭和52年10月1日
海老沢 盛一	秋川市	昭和52年10月8日	昭和54年10月1日
磐本 忠治	五日市町	昭和54年11月8日	昭和56年10月1日
黒山 富太郎	五日市町	昭和56年11月24日	昭和58年10月1日
井上 裕	五日市町	昭和58年10月4日	昭和60年11月4日
小野沢 森松	五日市町	昭和60年11月5日	昭和62年10月1日
岸 元彦	五日市町	昭和62年11月13日	平成元年9月25日
立川 勝好	五日市町	平成元年11月7日	平成3年9月30日
磐本 宣雄	五日市町	平成3年10月29日	平成5年9月27日
松本 榮一	五日市町	平成5年10月22日	平成7年8月31日
神田 好造	あきる野市	平成7年11月2日	平成9年6月30日
中村 進	あきる野市	平成9年7月22日	平成11年6月30日
御手洗 武	あきる野市	平成11年8月3日	平成13年6月30日
奥秋 利郎	あきる野市	平成13年8月3日	平成15年6月30日
澤田 安次	あきる野市	平成15年8月4日	平成17年6月30日
田中 良一	あきる野市	平成17年8月2日	平成19年6月25日
野村 正夫	あきる野市	平成19年8月2日	平成19年9月8日
戸沢 弘征	あきる野市	平成19年11月5日	平成21年6月30日
松原 敏雄	あきる野市	平成21年8月4日	平成23年6月30日
浦野 眞司	あきる野市	平成23年8月1日	平成25年6月30日
奥秋 利郎	あきる野市	平成25年7月31日	平成27年6月30日
野村 正夫	あきる野市	平成27年8月5日	平成29年6月30日
奥秋 利郎	あきる野市	平成29年8月1日	令和元年6月30日
合川 哲夫	あきる野市	令和元年7月30日	令和3年6月30日
清水 晃	あきる野市	令和3年8月4日	令和6年7月30日
村野 栄一	あきる野市	令和6年8月18日	

（注）平成25年8月1日より企業団へ組織変更

(2) 歴代企業団（組合）議会副議長

氏 名	市町村	就任年月日	退任年月日
中山 秀正	-	昭和22年12月16日	昭和26年6月30日
澤井 傳次	-	昭和26年7月9日	昭和30年10月1日
嶋崎 万二	-	昭和30年10月25日	昭和34年10月1日
青木 朋八	日の出町	昭和34年10月26日	昭和42年10月1日
清水 亨	日の出町	昭和42年10月10日	昭和46年9月1日
関根 国八	日の出町	昭和46年11月29日	昭和50年9月1日

清水 亨	日の出町	昭和50年10月30日	昭和54年10月1日
田中 莞治	日の出町	昭和54年11月8日	昭和56年8月31日
宮林 瑛	日の出町	昭和56年11月24日	昭和58年10月1日
野口 マリ子	日の出町	昭和58年10月31日	昭和62年9月1日
宮林 瑛	日の出町	昭和62年11月13日	平成2年4月3日
古山 喜一郎	日の出町	平成2年6月5日	平成3年8月31日
宮田 武夫	日の出町	平成3年10月29日	平成5年9月21日
木住野 豊司	日の出町	平成5年10月22日	平成7年8月31日
赤保谷 保	日の出町	平成7年11月2日	平成9年9月25日
清水 政男	日の出町	平成9年10月6日	平成11年8月31日
橋本 聖二	日の出町	平成11年12月7日	平成13年8月31日
東 亨	日の出町	平成13年10月9日	平成15年8月31日
青鹿 和男	日の出町	平成15年12月12日	平成17年8月31日
星野 茂	日の出町	平成17年12月12日	平成19年8月31日
濱田 敏郎	日の出町	平成19年11月5日	平成21年8月31日
加藤 光徳	日の出町	平成21年9月16日	平成23年9月16日
嘉倉 治	日の出町	平成23年12月20日	平成25年9月16日
森田 征四	日の出町	平成25年12月20日	平成27年8月31日
田村 みさ子	日の出町	平成27年12月18日	平成29年8月31日
小玉 正義	日の出町	平成29年12月19日	令和元年8月31日
青鹿 和男	日の出町	令和元年12月20日	令和3年9月16日
縄井 貴代子	日の出町	令和3年12月24日	令和5年8月31日
荻原 隆旦	日の出町	令和5年12月22日	
濱中 直樹	日の出町	令和7年12月23日	

（注）平成25年8月1日より企業団へ組織変更

(3) 歴代企業団（組合）監査委員（見識を有する者）

氏 名	選任年月日	退任年月日	備 考
田辺 康平	昭和30年11月29日	不 詳	
松沢 万吉	昭和43年6月25日	昭和49年6月24日	
石井 生一	昭和49年6月25日	昭和53年6月24日	
関根 清	昭和53年6月25日	昭和57年6月24日	
新井 芳太郎	昭和57年6月25日	平成6年6月24日	
山下 勇次	平成6年6月25日	平成14年6月24日	
青木 進	平成14年6月25日	平成22年6月24日	
土澤 義春	平成22年6月25日	平成26年6月24日	
清水 和明	平成26年6月25日	令和4年6月24日	
小泉 寛之	令和4年6月25日		

（注）平成25年8月1日より企業団へ組織変更

(4) 歴代組合管理者

氏 名	職 名	就任年月日	退任年月日
瀬沼 利氏	西秋留村長	大正14年4月10日	大正15年11月28日
中村 八郎右衛門	西秋留村長	大正15年12月17日	昭和5年8月14日
堀江 儀三郎	西秋留村長	昭和5年8月15日	昭和9年2月24日
平野 宗一	西秋留村長	昭和9年3月17日	昭和21年2月27日
中村 八郎右衛門	西秋留村長	昭和21年2月28日	昭和30年3月31日
村木 光三	秋多町長	昭和30年5月18日	昭和38年4月29日
谷合 昇	五日市町長	昭和38年6月19日	昭和42年5月1日
細谷 政夫	秋多町長	昭和42年6月22日	昭和46年5月1日
近藤 秀雄	秋多町長	昭和46年6月24日	昭和51年1月1日
森田 清	日の出町長	昭和52年3月8日	昭和53年3月6日
臼井 孝	秋川市長	昭和53年5月1日	昭和59年11月10日
宮岡 武一	日の出町長	昭和59年11月10日	昭和61年4月16日
臼井 孝	秋川市長	昭和61年4月19日	平成7年8月31日
田中 雅夫	あきる野市長	平成7年10月26日	平成19年10月14日
臼井 孝	あきる野市長	平成19年10月15日	平成25年7月31日

(5) 歴代組合副管理者

氏 名	職 名	就任年月日	退任年月日
近藤 秀雄	秋多町長	昭和38年4月30日	昭和42年4月29日
臼井 孝	秋川市長	昭和52年2月	昭和53年3月
臼井 孝	秋川市長	昭和59年11月	昭和61年4月
森屋 勇吉	五日市町長	昭和30年4月	昭和34年4月
谷合 昇	五日市町長	昭和34年4月	昭和38年6月
岸 義一	五日市町長	昭和42年4月	昭和50年4月
栗原 昇作	五日市町長	昭和50年4月30日	昭和62年4月29日
田中 雅夫	五日市町長	昭和62年4月30日	平成7年8月31日
志茂 忠雄	日の出町長	昭和30年7月	昭和42年6月
森田 清	日の出町長	昭和42年6月	昭和46年6月
森田 清	日の出町長	昭和49年6月	昭和52年3月7日
宮岡 武一	日の出町長	昭和53年4月16日	平成2年4月15日
青木 國太郎	日の出町長	平成2年4月16日	平成22年4月14日
橋本 聖二	日の出町長	平成22年4月15日	平成25年7月31日
清水 保寿	檜原村長	昭和34年5月1日	昭和42年4月30日
小泉 康作	檜原村長	昭和42年5月1日	昭和58年4月30日
中村 正巴	檜原村長	昭和58年5月1日	平成3年4月30日
鈴木 陸實	檜原村長	平成3年5月1日	平成15年4月30日
坂本 義次	檜原村長	平成15年5月1日	平成25年7月31日

(6) 歴代企業長

氏 名	選任年月日	退任年月日	備 考
荒川 泰行	平成25年8月1日	令和4年3月31日	
根東 義明	令和4年4月1日	令和7年3月31日	
武井 正美	令和7年4月1日		

(7) 歴代組合助役

氏 名	選任年月日	退任年月日	備 考
村木 光三	昭和40年9月1日	昭和47年8月31日	

(8) 歴代組合収入役

氏 名	選任年月日	退任年月日	備 考
渡邊 忠次	不 詳	昭和5年8月19日	
大沢 快龍(代理)	昭和5年8月20日	昭和5年10月21日	
鈴木 吉三郎	昭和5年10月22日	昭和6年11月16日	
大沢 快龍	昭和6年11月17日	不 詳	
中村 今一	不 詳	昭和19年7月30日	
武内 瀬雄	昭和19年7月31日	昭和33年10月10日	
田島 清之介	昭和33年10月11日	昭和47年2月7日	
森下 大次郎	昭和47年2月8日	昭和55年2月3日	
志村 幸雄	昭和55年2月4日	昭和59年2月3日	

(9) 歴代院長

氏 名	選任年月日	退任年月日	備 考
犬塚 道夫	大正14年 月	昭和5年 月	
佐野 繁	昭和5年 月	昭和7年3月	
土屋 立義	昭和7年3月	昭和9年3月	
河瀬 純三	昭和9年3月	昭和25年5月	
榊原 聡彦	昭和25年5月	昭和27年10月	
森 實	昭和27年10月 日	昭和51年4月30日	
馬島 季麿	昭和51年5月1日	昭和57年4月30日	
菅井 義久	昭和57年5月1日	平成2年11月21日	
平沼 俊	平成3年1月15日	平成15年1月31日	
岡田 清己	平成15年2月1日	平成19年3月31日	名誉院長
荒川 泰行	平成19年4月1日	平成26年7月31日	
西成田 進	平成26年8月1日	平成28年3月31日	
荒川 泰行	平成28年4月1日	令和4年3月31日	名誉院長
根東 義明	令和4年4月1日	令和7年3月31日	
武井 正美	令和6年6月1日		

(10) 歴代事務長

氏 名	選任年月日	退任年月日	備 考
田中 金吾	昭和35年4月1日	昭和42年1月31日	
浦野 演	昭和42年2月1日	昭和55年3月31日	
高木 清八	昭和48年6月1日	昭和52年5月31日	
奥田 猛男	昭和53年2月1日	昭和54年3月15日	
板垣 弘	昭和54年8月2日	昭和57年8月31日	
影山 護	昭和57年9月1日	昭和61年8月31日	
宮野 安治	昭和61年9月1日	平成元年3月31日	
島崎 利夫	平成元年4月1日	平成3年3月31日	

氏 名	選任年月日	退任年月日	備 考
清水 民也	平成3年4月1日	平成6年3月31日	
浦野 作一	平成6年4月1日	平成8年3月31日	
井上 晋	平成8年4月1日	平成10年3月31日	
大西 利明	平成10年4月1日	平成14年3月31日	
田邊 忠男	平成14年4月1日	令和19年3月31日	
田邊 忠男	平成19年4月2日	平成22年3月31日	
私市 豊	平成22年4月2日	平成25年3月31日	
青木 勇	平成25年4月2日	平成28年3月31日	
久野木 豊	平成28年4月1日	令和6年3月31日	
小峰 勝	令和6年4月1日	令和6年9月30日	
工藤 正幸	令和7年4月1日		

（注）浦野 演氏は昭和48年6月1日より事務局長に就任した。

（11）歴代看護部長

氏 名	選任年月日	退任年月日	備 考
浦野 ノブ	昭和58年7月1日	平成2年4月30日	
工藤 とし	平成2年4月1日	平成12年3月31日	
堀本 寿美	平成12年4月1日	平成17年3月31日	
飯塚 和子	平成17年4月1日	平成19年9月30日	
川上 道江	平成19年10月1日	平成20年12月1日	
川浪 すみ子	平成21年4月1日	平成27年3月31日	
井上 理恵	平成27年4月1日	令和5年3月31日	
薬袋 知子	令和5年4月1日		

参考文献・出典一覧

- 内務省衛生局『流行性感冒調査報告』1921年
- 西秋留村史1956年
- 西秋留村教育委員会 阿伎留病院組合『沿革および業務報告書』1934年
- 阿伎留病院『創立記録簿』1925年（院所蔵資料）
- 阿伎留病院『病床統計』1953年（院所蔵資料）
- 厚生省統計調査部『衛生年報』1948年
- 東京都『東京都病院名鑑』1969年版
- 秋川市史 1958年
- 阿伎留病院『新築工事報告書』1972年（院所蔵資料）
- 公立阿伎留医療センター企業団『企業団規約』2013年
- 公立阿伎留医療センター『100周年記念特設サイト』2025年
- 日本大学医学部『大学年報』『附属板橋病院年報』各年版
- 西多摩医師会『会報』第221号（2008）
- 阿伎留病院職員録・辞令簿（院内アーカイブ資料）

公立阿伎留医療センター開院100周年記念誌

発行日：令和 8 年6月1日
発行人：武井 正美（企業長・院長）
編集：開院100周年記念行事实行委員会
委員長：八田 善弘（副院長）
委員：武井正美・森 昭弘・神田直樹・福澤恵美
発行所：公立阿伎留医療センター
〒197-0834 東京都あきる野市引田78番地 1
TEL 042-558-0321
<https://www.akiru-med.jp/>

